

市民の学問所をめざして

—大阪自由大学の7年目の歩み

市民による「知的交配」と「世代交流」の場をつくりたい。そんな願いをもとに大阪自由大学を発足して7年目に入った。一般社団法人化（非営利型）して5年目だ。「リベラル」には、「自由主義的」というより先に、「気がいい」とか「ケチケチしない」「寛容」という意味がある——。哲学者の鷲田清一さんからそんなお話をうかがったのは、大学設立準備の講演会の席上だった。ドイツ語の辞書を引くと、なるほどそう書かれていた。大阪という都市の地層に深く息づくそのような大らかな「リベラル」精神を見つめ直し、再生させたいとの思いで活動している。



足元から考える

今年4月からは「新・大阪学事始」と掲げ、年間を通しての連続講座（月3〜4回）を展開している。大阪の歴史、文化を見つめるためにこれまで5年間にわたって連続歴史講座「大阪精神の系譜」（14期、計43回）などを開講してきた。それらを整理し、足元から再度、大阪のビジョンを描いていこうというのだ。4月には「総論」として「大阪の風土と町人学」「大阪学再見—なにわの興亡史から—」「世界の中の大阪文化」を、5月には「経済編」、6月には「文学編」、7月には「大阪の女性」を

池田知隆

テーマに掲げた。

ここは大学を名乗ってはいても、学校教育法という教育機関ではない。東京や京都などにもすでに「自由大学」を称するところがある。各地域には街の活性化を掲げたご当地大学も続出し、高齢者大学、健康大学なども挙げれば、大学と名のつくものは数えきれない。大阪自由大学もまた、それらの一つといえなくもないが、私たちは暮らしの足元を見つめ、多彩な人々との交流を重ねながら、新しい市民社会の形成に向けて模索している。学びとは、文化を単に「消費」するものではなく、「創造」していくものであるという確信に基づいてのことだ。

「私立の思想」と自由都市

大学の起源は11世紀のイタリア・ボローニヤまでさかのぼる。学問を目指して集まった人々たちによる自治組織（ギルド）で、学ぶ楽しさと考える面白さを求め、人生を豊かにしようという意欲にあふれていた。大阪にも古くから中央権力とは一線を画した自由な文化が育っていた。

江戸期の大坂で、町人たちによる学問所「懷徳堂」が生まれた。元禄バブルが崩壊した後には大坂の豪商たちが

出資して設立した学びの場だ。地方の各藩の財政状況が厳しい現実を見ながら、当時の大坂町人たちは「子孫に残せる財産は教育でしかない」と考えていたという。しかも今の財団法人のように元手の利子で運営する斬新な方法をとっていた。そこから富永仲基、山片蟠桃ら偉大な町人学者が育っていった。

「大坂は、自治都市であるとともに寄付に積極的な気前のいい市民文化があった。真の意味で『リベラル』な都市でしたよ」

懷徳堂の流れをくむ大阪大学の元総長でもある鷲田さんはそう語っていた。大坂文化の特徴は「大事なことは民間でやれ」という「私立の思想」だ。それは教育だけでなく、橋や公共施設の建設などにも及び、「大事なことはお上に任せない」という気風が明治まで引き継がれた。

学びの喜びを

幕末、緒方洪庵が開いた適塾。今に残るその建物は、2階建てのただの商家風の民家だ。門もない。その適塾について作家の司馬遼太郎さんはこう書いている。

「すばらしい学校だった。入学試験などはない。どわか者も、勉強したくて、遠い地方から、はるばるとやってくるのである。江戸時代は身分差別の社会だった。しかしこの学校は、いっさい平等だった。さむらいの子もいれば町医者の子もおり、また農民の子もいた。ここでは、『学問をする』というただ一つの目的と心で結ばれていた。」(洪庵のたいまつ)

さらに司馬さんは「なぜ大坂でレベルの高い学問所ができたのか」と問いかけ、こう指摘する。

「江戸では何かの為の学問だったが、適塾出身の福沢諭吉も言っているように大坂では目的がなかったことが幸せだった。しんどいことをやっている奴は自分以外どこにもいないという思いが支えだった」

大学とはそもそも、校舎も黒板もないところで、学びたい人が集い、自ら探してきた教授に問い、学ぶことから始まった。与えられたことを学ぶのではない。だれも

がやっていないことを学ぶ。自ら課題を見つけ、挑み続けることの喜びがある。

大阪は学問不毛の地か

しかし、大坂が大阪に変わり、明治期以降、その気風が受け継がれているとはいえない。東京大学を先駆けとする日本の大学は、お雇い外国人教師のもとで西洋文化の吸収、普及を掲げた。そんな「上から」の教育に反発してか、大阪では「実学」重視の風潮が高まっていく。

旧制第三高等学校(京都大学の前身)は、1869年に大阪で設立された舎密局(せいみきよく)理化学研究機関)に始まるが、1889年に京都に移転した。いつしか「学び」の気風は京都で育くまれる一方、大阪では経済活動第一の風土が形成されていった。

大阪は江戸期には「天下の台所」、大正期から昭和期にかけては「大大阪」と称され、敗戦後も経済繁栄を謳歌した記憶をもつ。それだけに東京一極集中化にともなう長引く経済地盤の沈下によって、大阪人の意識のなかに漂う閉塞感は複雑で、深い。

いま、大阪市内にある大学は11校。京都市(26)、神戸

市(20)に比べてかなり少なく、20政令指定都市のなかで9番目に位置する。学生数でいえば、約2万8000人と、同じく12番目と少ない数だ。

最近でこそ、梅田、中之島、難波などの都心にサテライトキャンパスが増えているが、それも学生募集や就職活動支援の場で、若者たちが相互に語り合う姿はあまり見られない。さらには文化施設、市民交流の公的施設は市の財政難を名目に一つ二つと消えていった。

「自由」の力の再生を

大阪には、多様な人々が流入し、多文化共生の市民感覚が育っている。経済格差の拡大、貧困の問題が深刻な大阪は、その意味で日本の先端地といえなくもない。市民が知りたい、知らなくてはならないことを学ぶ場がでないか。そんな思いで多彩な活動を重ねてきた。

研究職を探すことができず、コンビニバイトで暮らしている博士研究員(ポスドク)や大学院博士課程(後期)の学生たちにそれぞれの研究成果を市民に発表する場を提供しようと試みたこともある。社会的経験を積んだ高齢者との交流を重ねることで「知的交配」を図るた

めだ。さらには廃止論議が表面化してきた文化施設への市民見学会を開き、討論会を行なう「移動大学」も実施した。インターネットでなんでも検索できる時代であっても、直接、人と語り合って学ぶことの意義はやはり大きい。市民的公共性はそのからしか生まれないと、地域社会の「自由」と「自治」を考えてきた7年だった。

スタッフは新聞、放送などマスコミの現場で働いてきた団塊世代の定年者が中心だ。しかし、いつしか高齢化してきた。どこからも助成金を得ず、いわゆる「投げ銭」システムで続けてきた運営方式にも行き詰まりを感じるようになった。理想を高らかに掲げても、財政的な基盤がなければ、継続が困難になるのは当然のことだ。後継者を見つけ、バトンをつないでいくためにもいま、新たな事業化の道を探っている。

大阪という歴史と文化的土壌の豊かさを見つめながら、市民的公共性の生活感覚を広げていきたい。大阪自由大学ではそんな思いを語り、人々の魂を点火していくような「たいまつ」を掲げながら、できる限り長く走り続けていくつもりである。

●いけだ・ともたか(社)大阪自由大学理事長